

## 李 龍植『丹波マンガン記念館の 7300 日』(2009 年 5 月／解放出版社)

栗山 究

昨年 5 月、丹波マンガン記念館が閉館した。京都は丹波・京北地区にあるマンガン鉱山のなかに、在日朝鮮人である李貞鎬・龍植親子が創設した博物館である。朝鮮人強制連行や被差別部落の人たちの労働実態やそのフィールドを現在に伝える現地保存型の博物館として知られる。開館 20 年目の出来事であった。

本書はこの閉館の日に合わせて、同館 2 代目館長である李龍植により出版された。丹波マンガン記念館の歴史は、その著者である龍植のアボジである貞鎬の歩んだ歴史そのものである。それは同時に、近代日本が歩んできた歴史の在り方そのものに規定されていることが、本書を通じて理解できることだろう。そこからは、日本による朝鮮の植民地支配から朝鮮戦争を経て半島の南北分断へと至る歴史の過程で、日本社会のなかで在日朝鮮人の置かれてきた生活の境遇やその実態が浮かび上がってくる。また、日本の植民地支配に起因し、戦後も継続して連鎖する被害と加害の問題を、現在の日本社会の在り方そのものへ反省的に照らし出していく内容が綴られている。平易な文章で、問題の所在とその論点がうまくまとまっているため、とりわけ歴史学を専門的に専攻していない初学者にとっても、読者自身の身近な問題として接することができ、たいへん読みやすい一冊に仕上がっている。

本書は、二部構成・十章仕立てによって構成されている。第一部「丹波マンガン記念館の 7300

日」は、龍植のこれまでの半生において実際に経験し、アボジや周りの人たちから伝え聞き、そしてみずから調査してきたことがら、日本語による分かりやすい「語り」となって伝えられている。

## 第一章 父母の歩んだ道

## 第二章 「在日」に刻まれた歴史

## 第三章 アボジ李貞鎬が求めたもの

## 第四章 父との旅—朝鮮人強制連行とマンガン鉱山

## 第五章 じん肺との闘い

## 第六章 丹波マンガン記念館の誕生

## 第七章 丹波マンガン記念館館長を受け継いで

第一章から第三章では、丹波マンガン記念館初代館長であるアボジの生い立ちを軸に展開されている。アボジは幼少であった 1930 年代、日本に渡ってきた在日朝鮮人で、戦後も丹波において、戦時中に朝鮮人強制連行によって日本に渡らざるを得なかった同胞たちの世話などにも専心してきた自分たちの民族を大切にする人であった。1970 年代に入ると経済システムの変容により、日本の鉱山は各地で閉山を迎え、その労働者は急激に減少していくが、マンガン鉱山労働者でもあったアボジはその長年の劣悪な労働環境において、やがて「じん肺」を引き起こし、1995 年に 60 代の若さで他界する。龍植の見てきたアボジの生い立ちからは、アボジの日本での厳しい生活環境とともに、その周りには日本にくらす、そして差別に直

---

面した多くの朝鮮人の存在があったことが理解できることだろう。丹波マンガ山鉾山の戦前一戦後史においては、日本では人間らしい生活ができず、朝鮮にも帰れないなど、歴史のなかで戦前から戦後に至るも居場所のなかった人びとの存在が浮かび上がってくる。「同胞を軽蔑していたことの愚かさ」であったり、「故郷から遠く離れて、無念にも病に襲われている、あるいは身寄りが無い、故郷と連絡がとれないなど、さまざまなくやしい思い」を運動のなかから見てきたアボジは、この歴史を無かったことにしてはいけぬ、という思いから、マンガ山鉾山跡地を現地保存する博物館を創ることを決めていくまでのエピソードが明らかにされている。1980年代のことであった。

第四章・第五章では、朝鮮人の労働を「強制労働」として捉える視点を、植民地日本の歴史的背景から汲み上げるとともに、そこでの労働環境が「じん肺」を引き起こすなど、労働者一人ひとりの生命にかかわる問題とつながっていることが取り上げられている。こうした問題は、報道されること・されないことというメディアの問題や、被差別部落の問題とが密接に関連しあうことも指摘されており、私たちの生きる近代社会の矛盾が、具体的「証言」を通して綴られている。それはすなわち、丹波マンガ山鉾山記念館が伝えようとしていた内容でもあるだろう。

第六章・第七章では、実際に博物館をつくっていくこと、そしてそれを維持運営していくことの困難性が、時代の趨勢や支配的状況によって翻弄され続ける様相を通して、描かれている。人びとの「ワンダーランド」といったまなざし、行政の不对応、財政有志の拒絶、有志の人びとや「人権ネット」の支援によって生じる存続運動、借金の累積と決して黒字にはならない経営、そしてNPO

法人化から閉館を決意するに至るまで、丹波マンガ山鉾山記念館が直面した1980年代から2000年代にかけての各種課題が、ここからは汲みとることができる。そして「人権とは周囲の抵抗が少々あっても切り開く強さ」である旨を語る龍植の言葉の背景にある「ともに生きる地域社会の一員としてみてくれない」、そればかりか「治安取り締まりの対象」として見られてしまうという思いは、ひとり「博物館」が抱えてきた経験的問題の凝縮のみに留まらず、現代社会の問題をも照らし出している。

第二部「私の研究ノート」は、以下三章から構成されている。

### 第一章 在日朝鮮人差別からの解放を願って

### 第二章 加害の歴史を直視して

### 第三章 歴史の歪曲を糾すー田中宇『マンガ山鉾山』第三章批判

第一部の「語り」を通して、龍植が読者に伝えたいことのエッセンスは、この第二部の「研究ノート」に更に凝縮されて展開されている。以下では、評者がそれを、二つのメッセージとして再構成した視点から紹介してみたい。

まず一つは、在日朝鮮人の生活から私たちのとりまく「差別」の問題に眼を向けようというメッセージである。戸籍、就職、公務労働、入試、地方参政、外国人登録、住居、国民・障害年金、生活保護における差別、そして植民地被害と拉致問題という復讐の連鎖といった各種事例が、そこでは取り上げられている。

二つは、ジャーナリズムであれ、閣僚発言であれ、博物館展示であれ、加害の立場に立つ自らの

---

反省的契機がなく、自らの「負」の側面に触れることのない歴史記述は、歴史の歪曲を創り出すばかりか、今日に至っても新たな被害者を生み続けているのだというメッセージである。とりわけ博物館—博物館を学び実践するもの—にとって重要な点は、被害者への謝罪のうえに立った自らの加害の歴史に向き合った展示を表象する博物館が稀少であるという、現代日本の博物館が戦後に至るも抱え込み、歴史的にも刻み続けている構造的問題の指摘だろう。日本の博物館制度からむしろ疎外された領域で、支援者たちの手弁当によって創られた国立民営の博物館群が、辛うじてこの問題の一端を世界に指摘してきている現状がそこにはあることが、第二部全体では示唆されている。

評者が、丹波マンガン記念館が閉館される予定である報道を耳にしたのは、一昨年京都での第6回国際平和博物館会議前後のことであったと記憶している。この頃、地元メディアの一部では既に丹波マンガン記念館閉館の旨が報道されていた。昨年3月、京都では「丹波マンガン記念館を再建する会」発足へ向けた動きが見られた。博物館をとりまく多くの諸課題はなお継続し続けるものの、日本による朝鮮の植民地支配から一世紀を前後して現在、地元ではようやく、日本人も在日朝鮮人とともにお互いに手をたずさえ、歴史の検証と「再建」への道が模索されはじめようとしている。評者のくらす関東地域では、博物館問題研究会や博物館学院生共同研究会（そのつながりで本研究会の内山さんからのメールでの紹介があり、このメールを経て、評者が本書を紹介しているという経緯があります）などの研究会や、在日韓人歴史資料館などが主催するセミナーでは、この報道やその歴史的意味を伝えていたが、「再建する会」の

集まりに参加していた川崎在住の市民によれば、丹波マンガン記念館閉館をめぐる報道は、関東地域の人びとにはなかなか伝わっていかない環境があるともいう。

博物館研究の領域においてはどのような展開を見せているだろうか。かつて、君塚仁彦（2004）は、丹波マンガン記念館を「東北アジア『歴史を逆なでする』博物館」の一つとして紹介していたことがあった（『季刊前夜』第I期第1号）。福島在行・岩間優希（2009）は、君塚の紹介とその行為の意義を「平和博物館研究史」の文脈に位置づけ直し、その考察を深めている（『立命館平和研究』別冊）。日本国内では、制度からむしろ疎外され続けている領域で展開している出来事であるだけに、いわゆる「博物館界」一般には知られていないきらいもあるが、日本の「平和博物館」は現在、世界で最も注目されている社会教育施設の一つとして知られている（“*Museums for Peace: Past, Present and Future*” The Organizing Committee of the 6th International Conference of Museums for Peace, 2008）。

日本国内においても、北海道から沖縄まで、市民レベルにおいても、研究レベルにおいても、地道なネットワークが民間の、草の根の力によって広がってきている。若いメンバーの関心もひとときわ高い。多くの研究課題も残る。孤立を進める「博物館学」を目指すのではなく、本研究会においても、こうしたネットワークとの接続と交流を願ってやまないと思うのは、ひとり評者だけではないだろう。

【早稲田大学大学院／社会教育・博物館研究】